

信州読書会 ツイキャス読書会

課題図書 夏目漱石 『坊っちゃん』

信州読書会では、毎週、ツイキャスをつかった視聴者参加型の読書会を開催しています。

信州読書会のメルマガ登録者は、課題図書の読書感想文を 800 字で書いていただければ、放送中に紹介します。
(募集要項はメルマガでお伝えします)

また作品に関する質問・感想などは、どなた様も、放送中ツイートいただければ、とりあげます

信州読書会 ツイキャス <http://twitcasting.tv/skypebookclub>

『信州読書会』メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714

今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343

『ツイキャス読書会』音声のバックナンバーです。

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLVj9jYKvinCsgP7jtFgzqxea6cgqd7mrf>

(各回の感想文は動画の下の説明欄に PDF へのリンクを張っております。)



第 66 回のツイキャス読書会の課題図書は、夏目漱石 『坊っちゃん』です。

読書感想文を提出して下さった皆さんありがとうございます。

『坊ちゃん』感想文

『坊ちゃん』を今回、ウン十年振りに再読してみて、チェッカーズの『ギザギザハートの子守唄』を思い出しました。

小説は、「親譲りの無鉄砲で子供の時から損ばかりしている…」で始まり。かたや、歌のほうは、「ちっちゃなころから悪ガキで…」と始まります。

ただし、ギザギザ君のほうは、若さゆえの誰か分かってくれよという、孤独の熱い叫びで、人の共感を誘って終わるものですが、坊ちゃんのほうは、冷めたたい焼きのような味気ない、淡々とした終わり方をする話でした。

実はこの小説、漱石の後に続く「名作」と呼ばれる作品の序章にあたるものだと思います。だから、こんなにも終わりが辛気臭い。

この作品後、知られるように、漱石は次々と、頭でっかちな男の辛気臭さが充満した、着物を着なくなった日本人特有のいじましい話を連続して書いていきます。

この機会に、気になっていた「漱石」という名前の由来をしらべてみました。

若い頃に子規から送られた俳号ということで、「漱石沈流」という成句から、負け惜しみが強く、強情張りな人を称するのだそう。

立て板に水を流したような江戸弁、曲がったことが嫌いな熱血漢、気前も良ければ威勢も良い…漱石自身に若いとき、そんなところがあったのでしょうか。

この青年、冷ややかに見れば、自分以外のことが分からない、金銭などの実務的なことはおろか、女性はおろか他者や世間と関係がきちんと結べない、究極のエゴイストで、三四郎、先生、宗助等々が脳裏に浮かびます。

よく言われるように、世知に長けた「赤シャツ」が進化した漱石であるなら、「坊ちゃん」は、赤シャツ化する前の自己矛盾のない、「漱石ぼっちゃん」かもしれません。

異なる時期の自分像をダブルキャストで使ったこの小説で、日本人男性特有のエゴを両面から描いているようにも思えました。

(おわり)

熱き坊ちゃん

今回初めて読んだ坊ちゃん。可愛い少年が主人公だと思ったら、へんな中学教師が主人公だったので、最初はびっくりした。でも何だか今まで読んできた漱石の小説の登場人物とは違って新鮮な感じだった。

坊ちゃんは融通が利かなく、頑固でひねくれた性格を持っている。しかしそれながら、人のために義憤したり、自分を可愛がってくれた女中へ向けるいじらしい心を見せたりする、とてもふしぎで面白い人物だ。

その中でも私が一番気に入ったところは彼の訳のわからない熱き魂である。彼は社会経験が浅いせいか、人との付き合いに下手で、普通なら軽く笑い飛ばせるようなことも悪く勘ぐったり、邪推する傾向がある。場合によっては失礼でおかしなあだ名を勝手につけまわったりしていることも滑稽だ。でもその中で彼は一生懸命世の中とぶつかりながら、少しずつ成長していく。彼はなにごとにも中途半端にしておかない。とことんやるのだ。人に諂ったりはしない。自分が正しいと思うこと、自分の主張をそのまま直接披露する。自分はとてもそうできないことなので、彼のそういう情熱的な面々を見ながら羨ましいと思った。

前の信州読書会の音声で宮澤さんがおっしゃったように、マドンナと坊ちゃんと何等かの関係ができるのではないかと期待しながら読んでいたが、残念ながらそういう展開はなかった。でもやはり坊ちゃんは恋物語よりはこのようなプレーンな感じに似合うと思う。

大正・昭和時代の小説を読むと、経済や社会がどう発展しても、人というハードウェアは変わらないということをつくづく考えさせられる。横文字や難しい言葉を並べることで知識人を気取ったり、よそ者への嫌がらせに興じたり、作中ではとてもユーモラスで書かれているにも関わらず、実際自分がそういう待遇をされたと思うと居たたまれない感じがする。

坊っちゃんは無鉄砲な性格のせいで損ばかりしているというが、ここにそういう彼の性格が好きな人がいるとフォローしてやりたい。

坊っちゃん。あなたはどのような人生を送ったんですか。素敵な相手に出会って熱い恋をしてみたりしましたか。もしあなたに会える日があったら、楽しかったことも、つらかったことも、いっぱい聞かせてくださいね。楽しみにしています

(おわり)

『清の献身』

ちょっと難しい題名を付けてみました。

坊ちゃんの内容はなんとなく知っていましたがちゃんと読んだことがなくて今回改めて夏目漱石って凄いなど、坊ちゃんは良い作品だなと思いました。

親の愛情が薄い坊ちゃんにとって唯一の味方、清の存在が読んでいてホックリして好きな所です。

清は坊ちゃんも自覚するくらい優しく甘やかしているところもあるけれど、清から自分だけ小遣いなどを貰っている事に対して不公平だと感じる真っ直ぐな所や心のきれいな所は私が清でも、甘やかしてしまうかもしれないなと思いました。

家にいる時は清の事をそれほど重要だと思ってなくて、『越後の笹飴が食べたい』と言ったら、もてあます。と清も方向違いな事を言ったけどそれにしても冷たいなと思いました。

私の好きな場面は

(引用はじめ)

越後の笹飴が食いたければ、わざわざ越後まで買いに行って食わしてやっても、食わせるだけの価値はじゅうぶんある。清はおれのことを欲がなくて、まっすぐな気性だと言って、ほめるが、ほめられるおれよりも、ほめる本人のほうがりっぱな人間だ。なんだか清に会いたくなった。

(引用おわり)

どんな状況でも、清のように無条件で自分の味方になってくれる存在はすごく大切だなと思いましたし、いつも側にいる近い存在だとそれに気付かないでいる事も多いように思いました。

私は、誰かにとっての清でありたいと思いましたし、私にとっての清のような存在がいたら、まず居てくれる事に感謝することが大切だなと思いましたし、世間の荒波に揉まれながらも生きていけるんだと思いました。

(おわり)

『夢の馬鹿と叙情的風景』

日々生活していて、自分の思い通りにならない時、いや、むしろそんな時が多いのだけれど、空想の世界では勸善懲悪をやってみたくてという衝動にかられる。その勸善懲悪は、自分の価値基準での社会批判であり、恋人獲得であり、親に愛されることであり、その他様々なありとあらゆる欲求不満を、自分の好きなように滅多切りにしたり、強引に欲しいものを、勇敢に、奪い取ることだ。

威勢がいい。なるほど、坊っちゃんも漱石も江戸っ子だ。そのような「夢」を『坊っちゃん』は描いてくれる。人物の性質に誇張はあるがリアリティーがあるから、私の普段のストレスも一緒に、坊っちゃんが一蹴してくれる。

「ハイカラ野郎の、ペテン師の、猫っかぶりの、香具師(やし)の、モモンガーの、岡っ引きの、わんわん鳴けば犬も同然な奴」(p101 新潮)

という具合に。ああ、痛快！痛快！

そしてそのような騒ぎの後、

「頭の上には天の川が一筋かかって居る」(p92)

と小説は続く。

私はここで胸が詰まる。なんですか、この品の良い綴りは…。ぐっと来てしまう。なんという美しい文が挟まれているのだろう。漱石は坊っちゃんが俗世間で何をやっているかをよく分かっていて、このような普遍的な文章を挟むのだと思う。

私の大好きな『草枕』(好きといっても読解力不足で読めてないが、とにかく何度も読み返している)で「儂さ」「美」を語った繊細な神経の漱石が表れる。

清からの手紙を坊っちゃんが初秋の風に吹かれて読むシーン(p74) や、

「だから清の墓は小日向の養源寺にある」(p156)

などはしみじみと響いてくる。全てを挙げることはここでは出来ないが、ユーモラスで荒々しい多くの場面と、これらの叙情的な文章の落差や対照が、私の心に揺さぶりをかけてくるのだ。強そうな人がふとした瞬間に見せる弱音のような、嵐の後に柔らかい陽が辺りに差し込むような、叙情の風が鳴っている。

漱石っていいな…と思うのはこんな時である。

(おわり)

「坊ちゃん 平成改訂版」

校長は多くの報道人のフラッシュを浴びながら、深々と頭を下げた。そして、苦渋に満ちた顔で話し始めた。

「このような事件が起きましたことは誠に残念なことでございます。すべて責任は当事者の二人の教師と、管理者として指導の行き届かなかった私にあります。怪我をした職員には何の落ち度もありません。学校の名誉を傷つけてしまったことを深くお詫びいたします。」

その後、若い方の教師は生徒と前にもトラブルを起こしたことがあったが、教師になって一週間も経たない時だったので大目に見たことや、もう一人の教師は学校の秩序を乱す行動を起こす過去が度々あったという説明がされた。そして、最後に、「逃亡をする前に旅館で逮捕されたのは不幸中の幸いでした。」と締めくくった。

それから5年が過ぎた。

「お世話になりました。」僕は看守に向かって頭を下げると、これからの生活に不安を抱えたまま刑務所の門を出た。門の傍には服役中ずっと帰りを待っていた母の清子がいた。母は笑いながら僕を見つめた。僕は泣くのを我慢して「ただいま。」と言った。

「あなた、こんな遅くまで仕事をしていると風邪をひくわよ。」

妻の声で私は目が覚めた。どうやら明日の国語の授業の計画中に寝てしまったらしい。「夢でよかった。やっぱりこの話は現代では無理だな」

私は立ち上がると愛読書の「坊ちゃん」をごみ箱に捨てた。それから故郷の母に宛てて手紙を書くためペンを持った。

* (a.leaf)は創作した平成改訂版の話が起きそうな現代を憂っています。私はこの小説が夏目漱石の本の中で一番好きです。屈折した感情が書かれてないからさわやかで気に入っています。清さんの坊ちゃんへの愛にも感動しました。

(おわり)

坊っちゃんになりたいボーイと清に憧れるガール

坊っちゃんは無鉄砲。いつでも正義感にあふれ、曲がったことが大嫌いな竹を割ったような性格。それを清は、「あなたは真っ直ぐでよい御気性だ」と褒めてくれる。親子でもなく、師弟でもなく、恋愛でもなく。長年坊っちゃんに奉公する清の愛情は、どこまでも尽くす無私無欲なもの。坊っちゃんも遠国にきてあらためて清のことを懐かしく、有り難く、恋しく思う。

「相思相愛」という言葉は、相手を慕い、互いに愛し合うこと。恋人同士じゃなくても、そばにいたいと願い、相手の身体を思いやる気持ち。最後の 1 節で、帰ってきた坊っちゃんを迎える清の嬉しそうな姿が思い浮かんで、わたしもぽたぽたと涙が落ち、胸がきゅんとした。

坊っちゃんが事件に巻き込まれる度に、自分ならこんなときどうするだろうと考えてみた。ひとの顔色を眺めながら、のらりくらりとかわしてしまいそうで、大人じみてしまった自分に少し恥ずかしくなる。だからと言って、いつでも「坊っちゃん」を通せるほど、世の中甘くない。だから、自分の代弁者としての「坊っちゃん」はどの世代にも愛され、それぞれの立場で共感できるのだと思えた。きっとみんな坊っちゃんのように真っ直ぐな部分を失いたくないと感じているから、漱石の作品の中でもこの主人公は愛されているんだろうなと思う。

それにしても、清の心は愛おしい。ああ、わたしもあと何十年か経ったら、御墓のなかで坊っちゃんが来るのを楽しみに待っております。なんて言いながら最期を迎えたい。キエルケゴール曰く、女の本質は「献身」だから。誰かに献身しながら、楽しみをたずさえて死んでゆけるなんて、なんてうらやましい。そんな清にわたしは憧れる。

(おわり)

赤シャツ

「いてて、教頭、大丈夫でげすか？」

「ええ」

赤シャツ教頭と腰ぎんちゃくの野だいは傍にあった木の下でたばこを啜えた。

「君、人間とサルの違いがどこにあるかわかりますか？」

「なんでげす突然、教頭？」

「君、いいから答えてみたまえ」

「はあ、1日中イモを食って遊んで、交尾をするか喧嘩をしてるのがサルで、そうでないのが人間じゃないですかね」

そう答えた野だに、ふうとため息を一つついて赤シャツが語りだした。

「いいですか、人間とサルの遺伝子は98%同じです。その違いは何か。

まず第1に言葉を使うことです。

第2は手による道具の使用。

第3は2本足で立って歩くことです。猿回しのサルは訓練されているから2本足で歩きますがね、それも常にというわけじゃない」

「はあ」と野だは赤シャツの質問の意味を理解できないでいる。

「その3点で言えばあの二人もれっきとした人間であることは確かです。ただし、サルと人間では脳の発達部位が違うのですよ」

「なるほど、さすが教頭」

「いいから最後まで聞きなさい」と赤シャツは続けた。

「脳というのはですね、下の方にある古い脳、延髄と言いますがここに呼吸や心臓を動かすなどの生きるのに必要な機能がありましてね、また情動などをつかさどる辺縁系というところもあるのですよ。いわば野生で生きていく為の脳です。その上にバランスをつかさどる中脳や小脳があり、さらにその上に手足を動かしたり、見たり聞いたり感覚を統合する大脳皮質というものがあります。特に物事を考えて構成するという部位は人間が特に発達しているところなんです。

そういった意味ではあの二人、特に東京から来た坊っちゃんはその中の好き嫌い、良い悪いでしか物事を判断できない、議論もまともに出来ないくせに手だけは早く出る。飯は人の何倍も食う」

「つまりは人間のなりをしたサルみたいなものって事でげすな」

野だは納得したようだ。なおも赤シャツは続けた。

「いいですか、私達教師はまだ世間の知らない中学生を忠にはげみ、孝をつくす徳の高い者に育てるのが使命です。

それがあんなならず者にできる筈がありません。

我々が目指すべきは太鼓の音に合わせ剣舞を披露した若者達のように、国家の為一糸乱れぬ統率、団結がとれた美しい姿です。

坊っちゃんの如きは太鼓に合わせて猿回しの猿のように宙返りでもしてるのがお似合いです。

さあ、話も整ったところで行きますよ」
と赤シャツはシャツについた埃を払い立って歩き始めた。
「へい」と野だが続く。

「教頭、今日は蕎麦屋なんていかがですか？」
「いいでしょう。あそこは最近つきだしに美味しいイナゴの佃煮を出すらしいですね。まずはそれで一杯やりましょう」
「私は江戸っ子なもので、佃煮も蕎麦も少々うるさいでげすよ。ああ今夜も楽しみでげす」
朝靄の中、二人はよろよろと歩いて行った。

なんて想像しながら、坊っちゃんのように自分に馬鹿正直にまっすぐ生きられない僕は今ポンジュースを飲んでいる。
また道後温泉にも浸かりたいし、坊っちゃん列車にも乗りたいです。

(おわり)

大好きな坊ちゃん

私は小説坊ちゃんが大好きである。会社で嫌な事があると坊ちゃんを読む。そして会社の人に狸、赤ひげ、のだいこと坊ちゃんの登場人物をあてはめて心の中で悪口を言っている。だけど会社での私は坊ちゃんにはなれない。私はおそらくうらなりが一番近いのだろう。

だから坊ちゃんが落語みたいに語る人間模様はクスッと思わず笑いを誘い、そして私が言えない言葉を代弁してくれるので心がスカッとするのだ。

そして私は嫌なことがあると、山嵐みたいな同僚に話を聞いてもらう。女性なので山嵐というのはどうかと思うが、私の山嵐はピンチの時に自分の身を省みず上司に助言して救ってくれたり、あいつが定年になったら一緒に殴りに行こうと冗談を言ってくれる。

私には清みみたいな人もいる。私の清は、ぽぼさんの考えは正しいと思う、きつとずるい奴にはバチがあたるよいつも私を応援してくれる。だけど残念ながらまだ私には特別いいこともないし、嫌な奴にバチがあたる様子もない。むしろどうやら会社とは心ある人よりも狡猾な人間の方が重宝されるようである。

納得いかない事はあるけれど、私は2人に愚痴を聞いてもらってるうちに大抵の事はだんだんバカバカしくなってくる。私にとってはズルイ奴よりも身近な山嵐や清の方が大切だ。2人に感謝して嫌な奴はほっておこう、そう思えるのだ。

けれどそう思えるのは、最初から出世とは無関係なところに身をおいているからかもしれない。のだいこみたいに太鼓をたたくのも、たたかれるのも面倒くさい。

だからこそ私はできるだけ正直な人達と良い人間関係を築いて楽しい時間を過ごしたいと強く思っている。

そして閉ざされた社会の人間関係に振り回されないように私は読書をして自分を取り戻しているのかもしれない。

余談だが、私のお世話になってる同僚2人は、坊ちゃんを読んだことがないと言うのでプレゼントするつもりでいる。

(おわり)

『 無鉄砲ラブソディ 』

坊ちゃんは、「正論」が服を着て歩いているような人間だ。

そもそも正論とは正しいことなので、何も異論はないはずなのだが、彼の言動をどうしても心地良く感じてしまう。それは、たぶん坊ちゃんほど自らの成分が正論で占められていないからだろう。ただ、理解しているだけだ。

坊ちゃんのように、純度の高い正論でできている人間はどうしても眩しく見えてしまう。

実際、坊ちゃんの周囲の人間は「正論」だけではできていない。自らの利益しか考えていない赤シャツや野だいこ、狸やマドンナはもちろん、うらなりだってそうだ。うらなりは、婚約者を取られた挙句、落人のような転勤にまで甘んじてしまう。坊ちゃんなら、啖呵をきって断るだろうが、実際は社会と折り合いをつけないといけないのだ。赤シャツのような人間も確実に存在するし、「正論」を理解はしていても実行は難しい。だからこそ、現実にはできない生き方の坊ちゃんに目を奪われる。

さらに、無鉄砲な性格も加わり、坊ちゃんの人生は思わぬ方向へ向かう。でも、「無鉄砲」さも自分への自信がないと発揮できない。坊ちゃんの場合、自分の選択への迷いもその後の後悔もしない。しかし、正論と無鉄砲さのしっぺ返しは、坊ちゃんに確実に跳ね返る。親兄弟から疎まれたり、人付き合いの下手さからの友達のできにくさに顕れる。おまけに教師を辞めたあとの給料もかなり減った。現実 is 厳しいのだ。しかし、坊ちゃんには清というセーフティネットが幸運にもあった。坊ちゃんを100%肯定してくれる存在だ。その清の愛情に包まれて、思う存分「正論」や「無鉄砲さ」が発動できるのだ。清も長く生きて、世の中の煩わしいことに辟易していたのかもしれない。だからこそ、坊ちゃんを愛したのだろう。最後に、一緒に墓に入れるくぐりは微笑ましい。

ただ、大人になると「折り合い」や「適応」することも必要であるし、自らの意に添わぬことも多い。それを回避できることは羨ましいことではあるが、現実的にはまず無理だ。だからこそ、世間知らずということで坊ちゃんは終始「坊ちゃん」という名前なのだろう。

(おわり)

岡山読書会のブログです。過去のコラムなども掲載されています。ぜひご覧ください。

<http://ameblo.jp/kaoru8913/>

スカイプで個別読書を主催されています。ご興味ある方はブログからお問い合わせください。

ツイキャスのチャンネルはこちら <https://twitcasting.tv/yuuki27144>

「まっすぐでよい御気性」

(引用はじめ)

死ぬ前日おれを呼んで坊っちゃん後生だから清が死んだら、坊っちゃんのお寺へ埋めて下さい。お墓のなかで坊っちゃんの来るのを楽しみに待っておりますと云った。だから清の墓は小日向の養源寺にある。

(引用終わり)

清は、坊っちゃんを「あなたはまっすぐでよい御気性だ」と褒めていた。曲がったことが大嫌いという気性である。三四郎も、それからの代助も、こころの先生も、まっすぐな気性だと思う。坊っちゃんは、その気性を、物語の最後まで持ち続けることができた。しかし、それ以外の作品では、「まっすぐでよい御気性」が世間の複雑な事情の中で失われていくさまを描いている。

清は先にお墓で待っているという。宗助が参禅したように、坊っちゃんが、生きながらに門をくぐることはなさそうである。モデルになった養源寺は臨済宗のお寺だそうだ。『門』の設定とかぶるので、漱石は臨済宗に関心が深かったのかもしれない。

坊っちゃんは父母に愛されなかった。『門』では、「父母未生以前本来の面目」という言葉が出てくる。清の「あなたはまっすぐでよい御気性だ」というのは、「父母未生以前本来の面目」のことを言っているのかもしれない。ショウペンハウエルでいえば、「意志」である。

漱石もまた養子に出されて、父母の愛を知らずに育った。だからこそ、「父母未生以前本来の面目」について切実に思いをはせたのかもしれない。

清との関係を除けば、坊っちゃんは、どうしようもなく寂しい人だ。自己正当化もはなはだしい。自己欺瞞の強い人物だ。友達がいなくても平気なタイプだが、清がいなかったら、かなり精神的に参っていたであろう。

(引用はじめ)

汽車がよっぽど動き出してから、もう大丈夫だいしょうぶだろうと思って、窓から首を出して、振り向いたら、やっぱり立っていた。何だか大変小さく見えた。

(引用終わり)

清が、「まっすぐでよい御気性」に見ていたものは、坊っちゃんの成功とか出世といった現世利益ではないのは確かだ。

(おわり)

『信州読書会』メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714
今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343